

本当の教えに出会うことは「生きる」ことから、「生かされる」ことへの大転換

無碍の一道 第74号

発行:2019年7月10日
発行者:浄土真宗本願寺派 長尾山 天龍寺
副住職 天野英昭
〒739-0147 東広島市八本松西6丁目10番1号
TEL・fax(082)428-0160・(082)428-1360

盆会法座

日時 8月1日(土) 9:00~15:00頃

朝席 9:00~11:30 昼席 13:00~15:00

ご講師 山下瑞円 師(岡山県高梁市成羽町 浄福寺副住職)

磯松天龍寺墓苑並びに合同墓(永代供養墓)合同参拝

日時 8月12日(水) 18:00~19:30

場所 磯松天龍寺墓苑

※ 大変お忙しい時期とは存じますが、多数のご参拝を念じ申し上げます。
但し、天龍寺墓苑での合同参拝は、関係者の方のみとさせていただきます。

秋彼岸法座

日時 9月28日(月) 9:00~15:00頃

朝席 9:00~11:30 昼席 13:00~15:00

ご講師 松林 行圓師 (安芸高田市 善立寺住職)

第101回歎異抄輪読会第102回歎異抄輪読会

日時 7月16日(木) 14:00~15:30頃

ご講師 松田正典先生(広島大学名誉教授)

費用 500円

日時 8月20日(木) 14:00~15:30頃

ご講師 松田正典先生(広島大学名誉教授)

費用 500円

参加者 天龍寺の門信徒の方のみならず、どなたでも参加は自由です

★天龍寺仏教壮年会 月例会 7月31日(金)

一昨年の西日本豪雨災害、この度のコロナウイルスの経験を受けて・・・(Ⅱ)

ここまで科学技術、医療技術等が発達しても、我々の祖先が歩んだ道を現代の私たちも形は違えども、同じ道を歩む存在であると実感したことであります。また、学校を早期退職させていただいて10年がたちますが、お寺に帰った年に、あるご主人が『あなたは、ええ時代に生まれて、ええ時代に生きてきたの』と言われました。

確かに戦争の経験もなく、今ほど食べるものはありませんが、明日食べることに苦労をしたことがありません。よって私は、このままそのような経験をせずにこの境涯をおくるのかと漠然と思っておりましたが、一昨年の西日本豪雨災害、この度のコロナウイルスの経験も含め、それなりの経験をして、この境涯を去っていく存在であるとも思ったことであります。

さらに、4月にはあの強気なトランプ大統領が青ざめた表情で会見しておられました。あらためて人間が活着している境涯は、いとも簡単に崩れ去っていく、様々な物に立脚し、しがみついて活着している存在であるとも感じたことであります。

お釈迦様は、私たちのこの境涯は『苦しみ。すなわち自分の思い通りにならない世界である故に苦しみである。』とお示しく下さいました。近頃、この点も高飛車ながらこの言葉は『普遍的な真理』だと実感しております。

しかしながら、頭では理解をしておりながら、自分は、何とかその日その日を自分の思い通りにしようと悪戦苦闘し、一方で自分の思い通りにならないために不平・不満の繰り返しをしている自分が存在します。この境涯を活着していくことは本当に難儀なことだと思うことであります。『普遍的な真理』であると素直に受け止めることができれば、日々苦悩することもないであろうと理解しながらも、今申しましたように、なんとか自分の思い通りにしようと悪戦苦闘する自分があり、ある意味哀しい存在であるとも感じることであります。

一方で体は衰えながらも、自分を通して人間の欲は本当に計り知れないほど深いものであると還暦を過ぎしみじみ自分なりに実感することでもあります。

少し話は展開をしますが、当山の桜は4月の中旬に満開でした。前の寺報と重なりますが、桜は幸せ物だなと思います。人から喜ばれ、評価をされ、はたまた当山の桜には松が生えており、珍しいから後世に残せとご意見をいただき、昨年樹木医の先生に来ていただき、治療をしていただきました。品種がソメイヨシノでありますから、とくに寿命は過ぎているとご指南頂きましたが、先生の治療のおかげで『あと20年、30年は持つと言われたことであります。』先生のおかげで、今年の桜は例年よりたくさん花をつけておりました。

ある日桜をみておりますと足元にある小さな花を私は踏んでおりました。だれに見向きもされず。評価もされず、足蹴にされ、踏みつけられても、いただいた小さな命を精一杯輝かせておりました。桜には桜の輝きがあり、バラにはバラの輝きがあり、道端に咲いている小さな花には、小さなには小さな花の輝きがあると教え子から教えられました。

この度のコロナウイルス、西日本豪雨災害なども含め、人間という存在は、あまりにも小さな存在であると感じたことでもあります。

しかしながら、この小さな存在である自分ですが、今申しました人に見向きもされず、評価もされず、時に踏みつけられながらも、道端に咲く小さな花のごとく、みなさまに置かれましては、いただいたその日その日の自分なりの生命の輝きを放たれんことを念じ申し上げるしだいです。